



内海何来石漱予の門下ありて二十餘年  
 或るの治化は家名の功とありて名遂く  
 今東武に隠樂に於て乃齡は少の徒也  
 万句其名守城ありて不唐くもありて増々  
 利欲のきつかき増多七卷三寡書生に  
 健也風雅乃流ありてありて變化自在

ちよき皮何致功と報んや何を賜うてや  
枕心を賞き心今馬光老師の舊号致、  
何つるに重しを古紙櫃より出して  
贈と寸さや老後のきれい美も如し  
給くと云れ

掛香也類り記

錦紙ゆつる物

素丸



能誥此軒修文の家に  
師の屋下紙を赤号と譲り  
賜ふ事一書い、恐ま一交ハ  
かゝる者なく美もまたけい  
阿やめふつゝ、蓋生の店業  
はさしゝゝゝゝゝゝゝゝ

景華齋

あや美の朝よかゝり

石漱

賀章

石漱主人是とて三詠之類の風子  
文くそ名久し〜之代  
早暮高此号と詠詠くそ詠く  
くかはのけくあ〜ま、夜き〜ん

押お〜く花小一字の曇り

蓼太

号より讓秋標乃秋涼〜

楚茗

薫れ名子〜花も若う〜物染

野逸

辛抱の末らきり〜華葵

我泉

く〜梅も暑くも嬌〜志標

徳布

夏菊や齡と花〜〜讓りの

茂楓

花乃名を三絶と梅の茂り

菊露

風葉や赤くも不易此植下

逸窓

暑くも嫩く日なり紅の花

元山

意の名を汚さぬ梅若菜哉

逸守

○

鼻月のくくめは別号を  
漉るはく老人哉感す

武州鴻巣

徳かろき店や標乃荅曇

柳儿

○

芳くき名の川くさる新菜哉

泉州岸和田

楚柳

日小雲此花のかくや涼足草

巨山

暑く来く程鮮く意阿やめ

大坂

石席

咲つく菌や萎乃花らり

桂洲

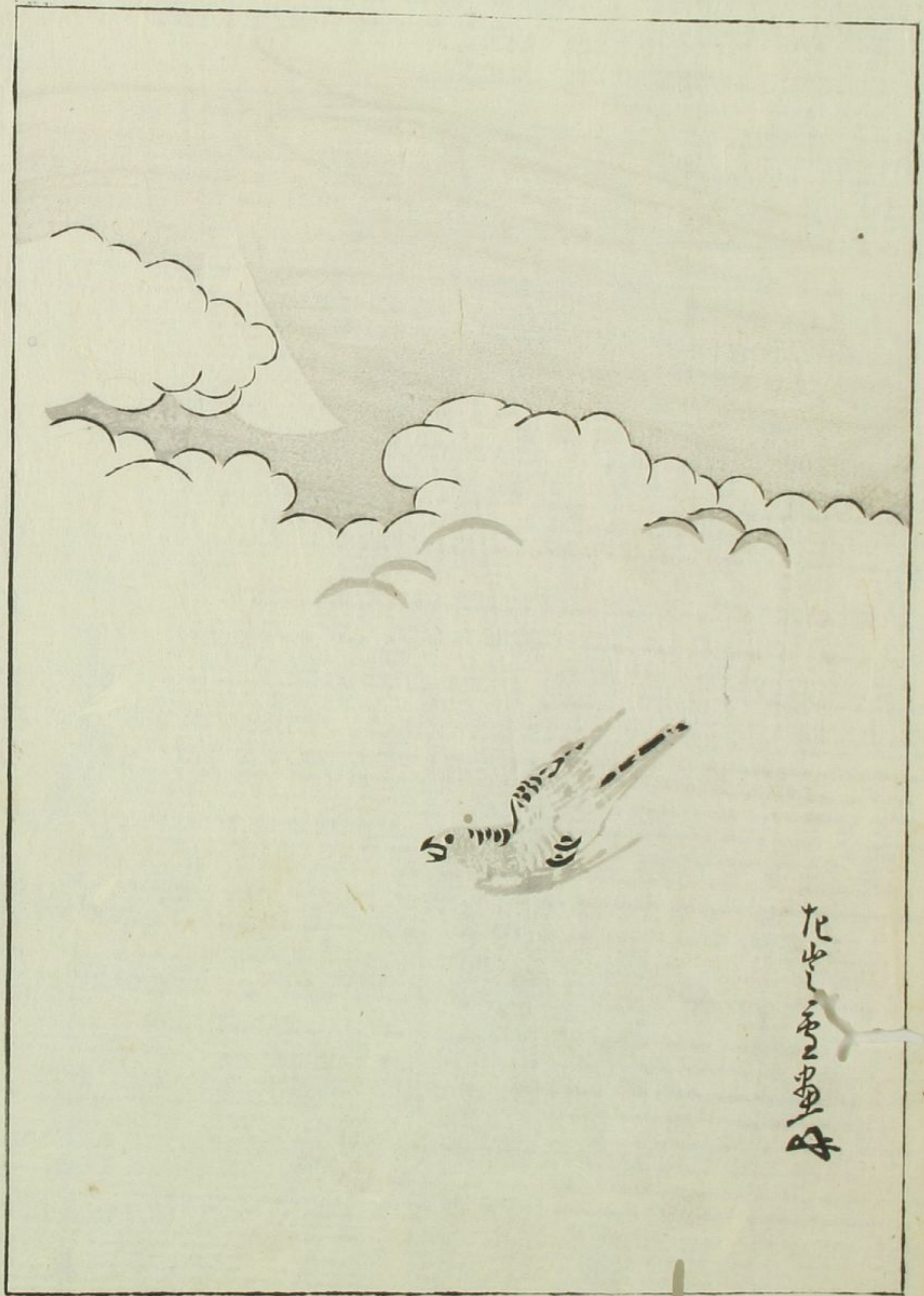
○

師家の及弟と笑へ

浪荅

橘やけ人形く此白ひ

竹阿



たしきるまゝ

歌仙行

馬光翁

月かきの風情はうき節よ

旅と命乃夏れりけいの

繪の傾けりしうぬ隈に毫投て

三ツ糸はり糸の襖敷く

物への玄釋は言れ時多きぬ

板乃梢千鶴のくすみ花

石漱

素丸

菊露

漱

丸

祈り流むまゝハ整好く仕丁も

露

似さくくの意は評判

漱

謎うけるもくた一首かたつこ

丸

才冬雲水の意をぬく宿

露

光陰の矢先も散るれおらぬるに

漱

吹流されの富士もぬ沖

丸

白粥に残の月此影冷く

露

枕とくく正儀々殊

漱

盆まの口説なく出ぬま清里

丸

うつりよりか庭も雪上に

露

よよ自よ花すう衣此異國張

漱

裏ハのころに條五形叶

、

喜くても知るぬお下の死漢達

丸

腹一筆書紙日名中の種

露

因の天々も作支地をも又

漱

為氷残踏む保元の京

丸

のさうも呉服後披の仕入物

露

きりけ言イッやうなる

漱

盃より波立ぬ落戸振

丸

流も慥り聳川出し

露

ぶ川よりとあるハ瓶を程め

漱

菅者一燈の鏡念の窓

丸

旁去く山うつり夕月

露

棒心かませく草摺の露

すし御く為めと痛と取れ来く

漱

心と起まぬ宇治の茶店

丸

川者も泣きよと雨

露

さ〜ハ宮本と川や〜

漱

太刀仙りかくやく舞の夕日乾

丸

柳乃鞭より喜此約

露



夏之部

布々たるきくなくや山家集

素九

海士あつてくく八十端の裕るか

竹阿

買ふくり市を流あつて夏の月

蓼太

すかきなる友と昔くく蓬る形

楚若

子乙女や村子思なれぬ却る

野逸

物類の悪くめらくく急素沙

徳布

貴とれくくや夏木立

茂樞

あつてくく小宅くくや舟の地牛

曇二

一日を扇下りさせよ 畢月雨

菊露

山乃井の常きくく日やかんこる

逸窓

位る花の深あよか記つてく

素龍

月高の不破吹くくく急素沙

右桃

澄仏とくくく衆生も新茶か

風菜

祇園舎やハ重垣くくく急素沙

桂洲

侍よりくくく之痛れ便死火より出

千路

○

月の果や箔子すり切。軸 鯉  
 誰後夜。唐ゆの。一。反。亦。立  
 語ける。その。巻。あ。一。富士。詣  
 さ。月。面。り。よ。も。馬。子。昔。より。り  
 大坂  
 野鶴  
 東波  
 速雅  
 竹老  
 桃丸  
 早乙女乃。並。眼。さ。地。む。入。日。小

風。の。め。く。折。戸。と。う。ぬ。水。雞。汁  
 巨山  
 悔。悔。や。藤。流。一。を。月。乃。前  
 松府  
 山。細。一。あ。れ。ハ。盆。な。り。夏。あ。ら。ち  
 青郊  
 系。よ。唱。う。ハ。花。な。り。ん。き。中。り  
 無的  
 夷。解。も。常。川。ら。ん。の。川。さ。り  
 同下平井  
 民志  
 川。せ。み。と。産。ん。と。あ。ら。り。杜。あ  
 武州大川  
 百丸  
 一。陶。配。お。し。り。り。一。沖。野  
 同鴻巣  
 杉夕  
 洞。ほ。よ。吹。ふ。ら。ま。り。る。杜。丹。う。あ  
 蘭共  
 標。啼。や。六。百。巻。の。土。用。子  
 石激

秋之部

松茸や目如く交りの帯より

楚若

名月や月より糸に隈もれ

蓼太

鳴く虫の巢とあつちや伊勢の家

逸宇

山住乃麗艶かへても秋の音

我泉

すみしき

月より松よりいそいそ

竹阿

○

之仗と悟るは軽一栢一葉

梅子

舟もよく尾花の袖や星をみ

素閣

萩の葉やさしんて寝るに月

茶柳

みかりは時あおとの層の那

我江

ささる目も今もあまや名の夢

万夫

義と恙く義の中りすきい

待和

谷底乃千尋と誠こく破々な

馬喬

何の月よつくともなめて花曇り

加候

初丁や星の帯もけねり

石席

青梨や層あはれせし秋の水

旧國

上總大神山

大坂

糸の色を穿つた照り木練柿  
川へ小刺枝をむき火くさ  
草うりや作向くよの隅をうり  
強くぬ中よ練うり雨の音  
結構なまうりうり音ハ晴まうり  
夜まうりや鼻突合は新ぼり

大坂

彫翁

今宵解くまの帯つり天の川  
あま車ハ落よませと梅の影

猷壽

咫徑

新酒や伏見の麦よりたは  
川秋やぬおろしと小松原

野蒿

馬水

澄々〜日の入る山や村りみち  
物色や一足ん飛んく竿の先  
縹々〜命の縄や鳴子引

白苧

戶外

素葦

名月や結の席書も俄り  
常盤木のまきさ中より紅葉山

柳几

杉風

士

○ 鹿才く行悦 硯は幽なる

素丸

冬之部

ふもつ夜や明月の照り 蹟一

蓼太

飯喰く 痛き人 何ををき 意仏

曇二

麦蒨の鶴 拵く世 秋日和 つか

野逸

いふふん 言を 擽く 拵 榊

竹阿

○

延る日 残抄あり 了や冬 玉柳

馬雄

ふもつあつと 浮世や 復花

河内 答田 蕨風

下げる 帆は 法路を 色む 雨小

泉州 岸和田 楚柳

言此 昔人 心きく 拵ひりり

上総 椿 布川

亦阿てる 巖は 縁のた ますと 哉

同 天神山 一之

月落く 証も 隈なき 十夜小

京都 大山

竹光の 犬追ふ きのや 冬月

大坂 玉東

是ほよの きのあ 喜れ 今朝の 言

千賀

礼くハ 風そくし 枯尾花

素雲

老く 水若や ぬく 一 氷

李風

板鋪は祖師と向ひてきく家  
 方おも今枯き多ゆく紙衣は  
 山といふ苦行の瘦や冬木立  
 作向よあけく笑ふや大根引  
 紫の巻や雨くまほむむほと  
 板あらしの船業に烟る木葉哉  
 杖のふと柱よすするあふりか  
 ○  
 志く新いいさよ時お妹脊山  
 信阿 維石 林鳥 由之 百斗 瑞葉 石漱 素丸

表之部

正月小梅をなみく人安し  
 南くくゆきもきくは月  
 言氷まゝのちと若菜のち  
 山既子身ふみすれは言毎哉  
 世の梅は香取の衣や朝庭  
 枝鞠よあつりけり松の雲  
 雲と集る氣とくくして梅は  
 枯活の鳥も生く山の白く  
 竹阿 蓼太 宜明 逸雅 里丸 野叟 立砂 稻後

房州勝山  
 同  
 同川名  
 下総布川  
 同小金  
 甲府

濃く薄く素良のつらりの茎ふ  
 梅咲や菜飯乃れも新しき  
 若叶の風も元多きうら  
 まご降るし木屑のほの香  
 かけりや蒸かきくる麦畑  
 新落く池つらぬきう夜の花  
 花の世とせれく一の別ま下  
 巨魁も老ゆみりう去の雨  
 子光  
 鴉墨  
 素社  
 蕨夕  
 左櫻  
 竹賀  
 橘賀  
 有里

梅園の雪あらしき  
 交交も地となす柳の素  
 かし粟にあらうきあらし月  
 清代も教は出廊の彼岸  
 红梅や新雪を照らす小柴垣  
 貫りれくしらぬくや猫の足  
 青雲をとりくふる祝の音  
 苗代の水と樋口の蔭初るき  
 山吹や色はまきくゆき  
 澤雉  
 鷹一  
 鳳吹  
 漢水  
 素金  
 桃曉  
 久河  
 友山  
 一見

大坂

先任の種もれすく 桂の分  
 暁ハ雲と志すめく 高海江  
 何となく 藤く 並しも 高葉江  
 杉の木の 影さくく 夜の花  
 春の 雲さく 桂のおほり月  
 宗壽 窓旭 来二 牛歩

陽のからにんかりく や春の雨  
 青柳や 男やうひの 鞠掛り  
 斜乃 誰く へく せん 梅の花  
 泰路 素愿 白芥

福川や 風中の 切きる 鳥もさ  
 高葉や 麦も たよりく 幾さめ  
 夕暮や 桜かさく の 行ふ 経  
 汐子 物 風 鳥の 涼く へ 度りりり  
 抄々ハ まく 高葉や 梅の 花  
 春の 雲さく 梅く 高ききけり  
 瀧 抜て 風さく 雲の 影  
 不二翁 都静 行脚 奥祥 大阿 仙李 墨川 李下 進舟

大坂 豊後



雪の水 霞よりなま交初春哉

武州赤岩  
法雨

笑ひ出た山やあつとく花曇

昇中

柳 家くくくく日暮言く

石漱

○

一草くくくくの處乃為菜菜種

宗瑞

梅く美や北野詣の陪みとも

梅年

一層さくかたへくつと葉の那

柳儿

皆まてくハ咲くせふあくく梅の冬

秋瓜

春毎や霞も晴も柳より

京  
儿董

○

梅く美や山平から新袖あく

楚茗

春柳もくくくく向くく子穂唄

安袋

む先の花雪ハやみくく捨く美人

梅人

怖く春ハ鐘水も柳くの如

柳門

ふ梅の波やまねくくく切き愛

野逸

○

出かりや趾へ引くく柳髪

我泉

その美ハ不破も寒くく美そ

徳布

秋ハ蟹よりハ灯すや猫の意  
 菊露  
 ふとくろか温泉の山持く産ゆ  
 逸窓  
 系餅や青きとふに嵐も  
 兀山  
 鳥の巢や已く産卵も控中守  
 茂楓

○

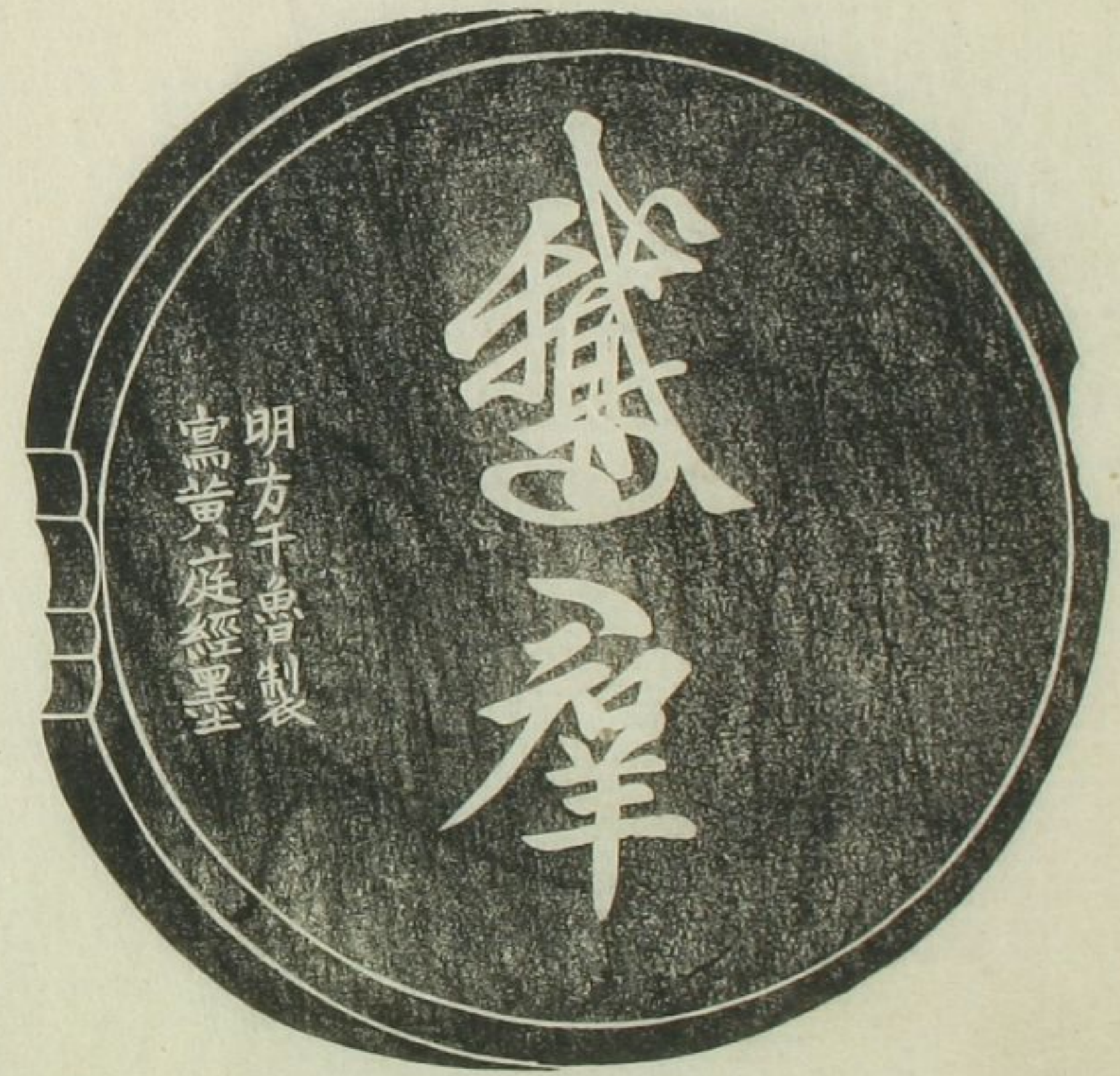
嘆とあふさくや  
 素丸

二度の山つゝ

唐墨之圖



笠窗巨山窓



紅梅子青く横くは葉の那

鷗心亭 変名柳居  
長水

六走り〜 這子立り夜々え

白兔園  
宗瑞

葉や不引足く在る只もね

樽巷郎 姓号珪琳  
蓮之

名月や顔ハ篩白の人通り

柳隣 別号実和  
尺

年忘座臥心よりれ物日山

絢堂 変名馬光  
素丸

二篇

鶴や一夢あり心花此名

二六菴  
竹阿

初声子傳文も少くは時名

白兔園  
宗瑞

名月や水文是水子居る人

絢堂  
素丸

於人子小袖度すや高の物  
石中堂 斑象  
うー忘渡り事板の本なるる  
雪中菴 蓼太

三篇

ううくし月の如きを梅分  
練水舎 楚若  
さ月よりや多やふらん散牡丹  
第一園 梅人  
うつ汐やい時山の笑い  
其日庵 野逸  
日の色れいよく赤くを物の色  
裏々弁 柳門  
夜津糸や梅りのくく面て白  
今日菴 栢翁

小田原といふ所平にあり  
と記海鳥を眺むる一侍

長き日やわれ一事忘る

磯の波

生死乃ほ生も又くくの如く物也  
あくあくくもと海事  
いやくくく万劫を繰り返すもいやく  
夏屋うら

老菴園

馬光出



天明四甲辰年五月朔日

423  
04

Handwritten notes and a red seal at the bottom left of the page.

十九

